

自己決定を促す支援のあり方について

—算数科「かずあそび」の実践を通して—

関 和 典

1

(1) はじめに

養護学級では、教育目標として「生活力のある子ども」を掲げ、子どもたちがそれぞれの実態に応じたのびのびと力一杯活動し、健康で楽しい学校生活を送る中で、様々な要求や力を実現していくことを願い日々の教育活動を計画している。そうするために指導者は子どもたちの要求を取り上げ、力一杯活動できるように、他の子どもやその周りの環境に対して適切な支援をしていく必要がある。

本学級では、生活力と自立に向かうこととの関係について明らかにし、「自立に向かう子どもたち」というテーマのなかで自己決定ということをさらに突き詰めて考えていった。昨年度は、児童が自己決定をしていく中で一人ひとりの実態が異なる状態での自己決定のプロセスや背景、決定した事柄は個々のものとなるという前提のもとに、自己決定の場を、個々の実態をみて設定していくことについて考察を加えた。その中で子どもたちは、それぞれに好きなものや、やりたいことがあり、それが意欲となって他者へ要求を出していくものであり、子どもたちの生活の中から出てくる様子をしっかりを見ていくことで、学習活動が子どもたちのまさに欲しているものとなり、その学習活動を整理して一つの単元にすればより効果的であるということが大まかに検証することができたと考える。

今年度本学級では、昨年度の実践をもとにして、児童のしたいことを自己の判断で決定できるように、選択肢を具体的に示していくようにする。また、それと同時に、したくないこと、嫌なことを明確にしていくような支援の手だてを考えていくことを研究の柱として考えた。

さらに、自己選択することが児童の生きる力となっていくためには、積極的な自己選択が行われていることが重要である。そこで、なぜこれを選んだのかという一人ひとりの選択行動の意味づけをしていきながら、個別の選択行動について明らかにしていく。

考 え ら れ る 「 意 味 」 に つ い て

- ・偶然手にした方を選んでいる。
- ・「どちらも好きだけど、こちらを選ぶ」という意識をもって選んでいる。
- ・過去の経験から活動の見通しのもちやすい方を選んでいる。
- ・自分にとって乗り越えなければならない課題の有無で選んでいる。
- ・友だちの模倣によって選んでいる。
- ・友だちや指導者の活動を見て見通しがもてた方を選んでいる。

上の表のように、自己選択・決定するときの「意味」も考慮していきながら、実際の指導の中で児童がどう自己選択・決定を行ったかということについて次に述べてみたい。

2

(1) 単元について

児童は数的認識を日常生活の中から少しずつ学んできている。数の学習をしていくとき、児童は具体的な操作を行うことで量に対する実感を生み、個々の数的認識をのぼすものとする。児童が活動意欲を起こすようなゲームを取り上げ、具体的な操作を行う中で数的な処理をスムーズに行うことができるようになることを願い本単元を設定した。

また、児童の数に関する実態は次のようである。

(2) 数についての実態と課題

児	実 態	課 題
⑩	数え足しで繰り上がりのある足し算をすることができる。5のまとまりを意識して、5といくつという表現ができる。	5のまとまりを操作することで繰り上がりのある足し算をすることができるようになる。
⑪	5や10のまとまりを意識して繰り上がりのある足し算をすることができる。覚えているものに対しては操作なしで合併できる。	計数したものを立式して繰り上がりのある足し算を行うことができるようになる。
⑫	数え足しで10までの足し算をすることができる。5までの数に関しては、具体的な操作なしで合併することができる。	5のまとまりを意識して、計数を行ったり、繰り上がりのある合併を行うことができるようになる。
⑬	数え足しで10までの足し算をすることができる。加数から被加数に移るときにスムーズに次の数をいうことができる。	5のまとまりを意識して計数を行うことができるようになる。10までの合併がよりスムーズに行うことができるようになる。
⑭	数え足しで繰り上がりのある足し算をすることができる。5のまとまりを意識して、5といくつという表現ができる。	計数したものを立式して繰り上がりのある足し算を行うことができるようになる。
⑮	数え足しで10までの足し算をすることができる。加数から被加数に移るときにスムーズに次の数をいうことができる。	5のまとまりを意識して計数を行うことができるようになる。10までの合併がよりスムーズに行うことができるようになる。

(3) 児童の自己決定について

本単元では、児童が数的処理を行う際の方法について、自分で処理方法を選択し課題を解決していくことができるように、いくつかの処理方法を提示していきながら自分だけの解決方法を見いだしてほしいと考えた。しかし、上の表のように児童の数に対する実態は様々であるので、児童が自分で処理することが可能であるかどうかの見極めが指導者側に必要となった。そこで、写真のように児童にそれぞれの段階に応じたものとそれ以外のものを一緒に一つの箱の中に入れて、児童に提示し、その中から自分が一番数的処理を行いやすいと思われるものを選択していくようにした。こうすることにより、児童が自らの課題と自分で決めることとを、同時並行して行うことができるのではないかと考えたのである。これらは、児童がこれまでの算数の中でよく使っているものである。



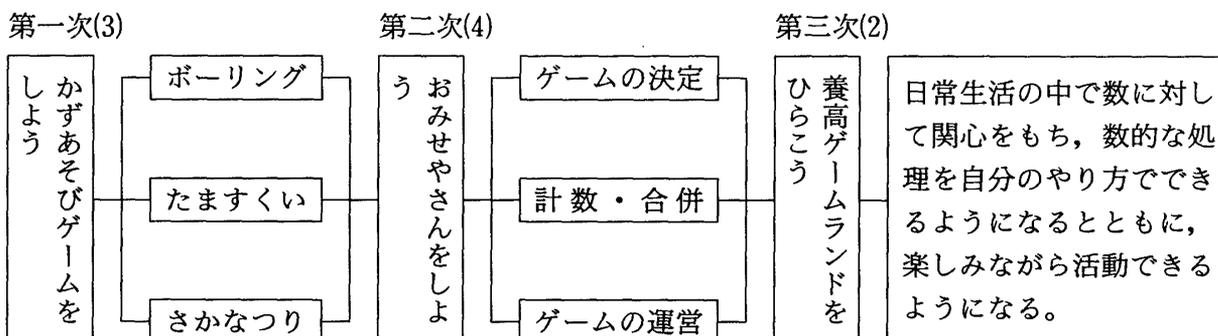
本単元の児童の自己決定にかかわる実態と課題は次のようである。

児	実 態	課 題
⑩	既習の事柄を使って、数的処理を行うことができる。	自分のやりやすい処理の仕方を見つけて行うことができるようになる。
⑪	既習の事柄を使って、数的処理を行うことができる。	自分のやりやすい処理の仕方を見つけて行うことができるようになる。
⑫	既習の事柄を使って、数的処理を行うことができる。	自分のやりやすい処理の仕方を見つけて行うことができるようになる。
⑬	指導者の支援によって、数的処理を行うことができる。	指導者の支援を受けながらやりやすい処理の仕方を見つけて行うことができるようになる。
⑭	既習の事柄を使って、数的処理を行うことができる。	自分のやりやすい処理の仕方を見つけて行うことができるようになる。
⑮	指導者の支援によって、数的処理を行うことができる。	指導者の支援を受けながらやりやすい処理の仕方を見つけて行うことができるようになる。

(4) 指導目標

1. ゲームをすることを通して、数を操作することの楽しさを味わうことができるようにする。
2. 自分で数的処理の方法を選んで計数や合併を行うことができるようにする。
3. ゲームのルールやきまりを理解し、役割を分担して活動することができるようにする。

(5) 指導内容と計画



3 指導の実際について

(1) 第二次第3時の「おみせやさんをしよう」について

① 本時の目標

- ・ 自分のやり方で計数や合併をすることができる。

② 仮説について

これまで述べてきたことから、以下のような仮説をたてた。

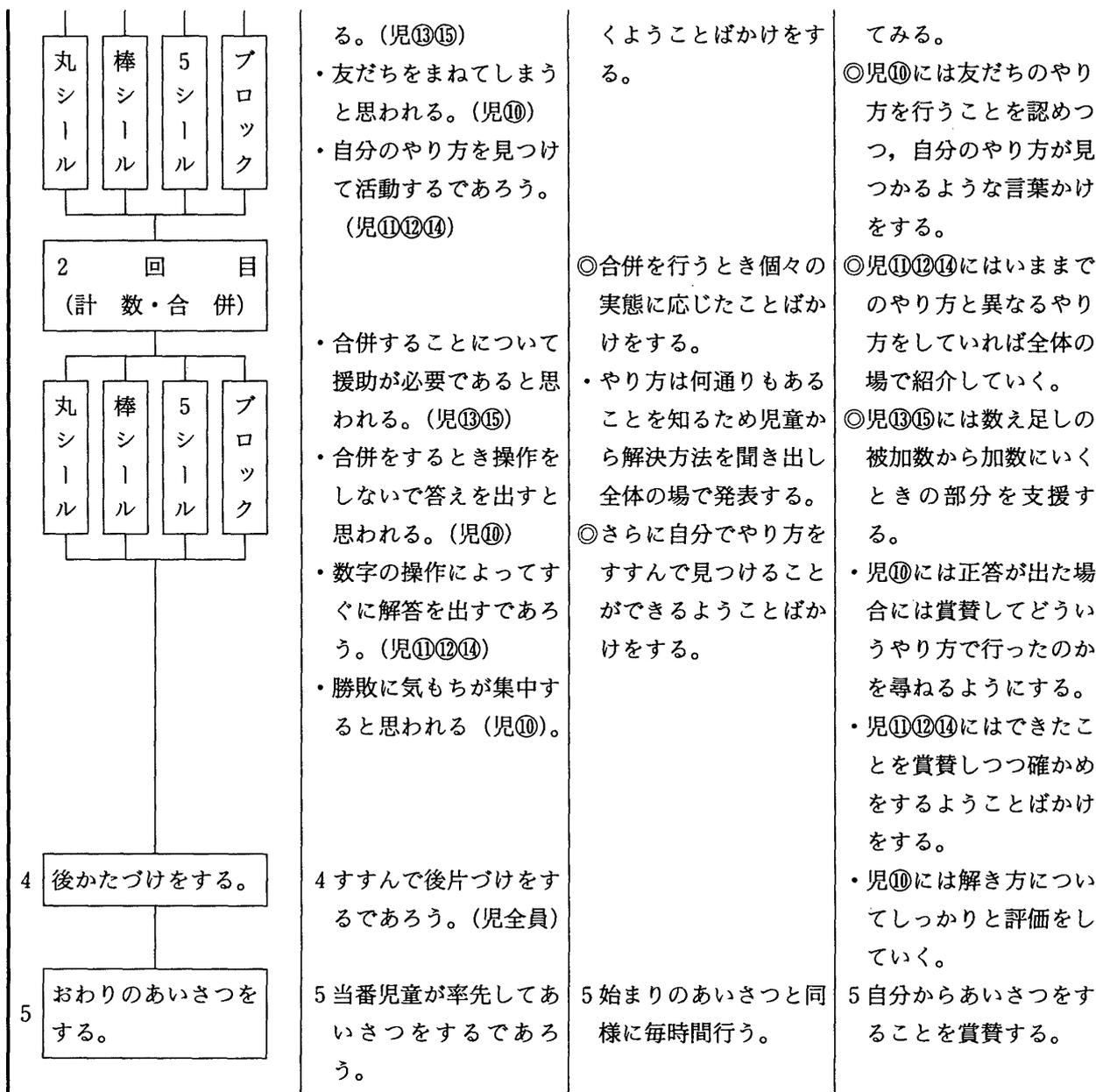
児童にいくつかの方法の中から計数や合併の仕方を選べる教具やワークシートを提示するならば、児童は自分で処理方法を選択して計数や合併をすることができるであろう。

③ 目標行動について

目 標 行 動	自己決定にかかわる指導者の支援	児 童
自分の持っている計数・合併シールの中から一つを選んで、10までの計数や合併をすることができる。	自分の使いたいものが選択できるようなことばかけをする。	⑬ ⑮
自分の持っている計数・合併シールやブロックの中から1つを選んで、5のまとまりを意識して10までの計数や合併をすることができる。	自分の使いたいものが持っている物の中から選べるようなことばかけをする。	⑫
自分の持っている計数・合併シールやブロックの中から1つを選んで、5のまとまりや10のまとまりを意識して、計数や繰り上がりのある合併をすることができる。	自分でやりたいものを選んでいくようなことばかけをする。	⑩⑪⑮

④ 学習の展開

学 習 の 展 開	予想される活動	教 師 の 働 き か け	
		全 体	個 別
1 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> 始まりのあいさつをする。 </div>	1 あいさつの前でもゲームの準備を行うであろう。(児⑩)	1 あいさつは学習の始まりとして毎時間行う。	1 児⑩には見通しがもっていることについて評価しつつ先にあいさつをするようことばかけをする。
2 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> 玉すくいゲームの準備をする。 </div>	2 率先して準備を行うであろう。(児全員)	2 必要な道具や配置などが正しい場所に行くようことばかけをする。	2 自分たちで準備できていることを賞賛し、活動の意欲づけとする。
3 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> 玉すくいゲームをする。 </div>	3 楽しんでゲームを行うであろう。(児全員)	3 二人ずつペアになってゲームを行うことや音楽などで意欲を喚起する。	3 一人一人に賞賛のことばかけをする。
1 回 目 (計 数)	・どのやり方にするか迷ってしまうと思われる	◎自分の計数の仕方を選択肢の中から選んでい	◎児⑬⑮にはそれぞれに合ったやり方を提示し



4 考 察

(1) 児童が選択しやすいものを提示することができたか。

右の写真のように、個々の児童に対して、3種類のシールを準備した。児童は、最初のうちは、今まで使っていたものということで選択していたようである。(児童にとって見通しのもちやすいもの、算数の時間ではこうするものという観点で選んでいたようである。)児⑩は、友だちが選んだことによって、自分の課題ではないものを選ぶことが予想されたが、ことばかけをすることによって自分の課題のシールを選ぶことができた。児⑪は、シールを使うことがしっかりと理解できていたので、こちらの働きかけがなくても自分の課題のものを選ぶことができた。児⑫は、3種類のシールの中からことばかけによって自分の課題のものを選ぶことができた。児⑬は、児⑩と同じように、自分の意識している友だちをまねて選択すると思われたので、ことばかけを行った。そのことによって自分の課題のものを選ぶことができた。児⑭は、児⑩と同様に、ことばかけの支援がなくても自分で選択することができ



た。児⑮は、隣に座っている友だちがどういうことをしているか気になって見ていたが、自分のいつも使っているシールを使って課題をこなすことができた。

(2) 計数や合併に「選択肢」を設けたことに妥当性はあったか。

児童が、加法の演算を行っていく際、個々の数に対する実態から、それぞれの段階に応じた処理の仕方は存在して、それを指導者が適切に支援をしていくことによって数の認識や計算する力がついてくることは疑うまでもない。本実践では、あえて指導者がこのことを児童に「任せた」形に結果的になってしまったと考えられる。そのことで実際に本単元で数的な認識や計算力が身についたかという疑問が残る。本単元では自分の身の回りにおこる数的なことがらを自分の力でいかに解決するかということについて、児童の既習の事柄をフルに利用しながら、そのことに向かっていく力を付けて欲しいと考えた。その中で、身の回りにあるものを自分で選び、それを利用することによって自らの力で課題に向かうことができるように、やり方を選択していくという考え方においては、本単元は児童に対しての「自己選択・決定」の力をつけるものになっていたのではないかと考えられる。

5 おわりに

本研究では、児童が数的処理を行う際、自分のやりやすいやり方で行うことによって将来の生活をより豊かなものにしてほしいという願いをもっているいろいろな取り組みをしてきた。児童が大きくなって実際に買い物をしていくことになると、おつりの計算等で自分の能力ではすぐに答えを出すことが難しい場面に出くわすかもしれない。そういった中では、計算機を使うという選択肢も視野に入れるということも考えていくことが必要となってくるものではないか。数的処理の力を付けるためには個々にあった段階的な指導をしていくことが必要であるが、自己選択・決定ということを考えると児童にとっての数的処理というものも、かなり視野を広げて行かなくてはならないのではないかとことを考えさせられた実践であった。